



# ありのままの 秋田がいい

〔秋田市観光クチコミ大使〕  
株式会社マロニエゲート  
取締役 経営企画担当

はな だ よし お  
花 田 吉 雄 氏

2014年9月から1年9カ月、読売新聞秋田支局長を務めました。豊かな自然と人情にあふれる環境で、30年近い記者人生の中で一番、充実した日々を送ることができました。赴任中は「秋田の魅力や潜在力をどんどん記事に引き出して、秋田を誇りに思えるような紙面にしよう」との目標を立て実行に移しました。その一つが、秋田犬に焦点を当てた連載でした。世界的に人気を集めているのに、県名を冠している秋田犬の潜在力を生かし切れていない、と感じたのがきっかけです。同じく「秋田市観光クチコミ大使」で、生き物に関する著作もある宮沢輝夫記者を中心に秋田支局員総出で、読売新聞と英字紙「ジャパン・ニュース」への原稿執筆に取り組みました。併せて、国際教養大学で「秋田犬フォーラム」を開催し、秋田犬による県の振興を目指してPRにも力を入れました。1年以上紙面展開していくうちに認知度も高まり、県や大館市の観光客誘致戦略に結び付けることができました。その後、秋田からそのままモスクワに赴任し、秋田犬「ゆめ」を同伴したプーチン大統領と会見や、女子フィギュアスケートのザギトワ選手への「マサル」贈呈式に立ち会うことができ、秋田のペット外交が高く評価されていることをうれしく思いました。

秋田の人にとって見慣れたものでも、県外の人にとっては魅力的に映ることがたくさんあります。例えば、ロシア出身の県国際交流員エカテリーナ・シャバラさんのユーチューブ動画をみると秋田の魅力が改めて感じます。「アニメに出てくるきれいな山や田んぼの景色が本当に存在していて、見

るたびに毎日感動している」と話していたのが印象的でした。秋田市出身の土方巽が確立した舞踏（BUTOH）は、欧米では前衛アートとして格段に評価が高く、舞踏の誕生のきっかけとなった羽後町田代には「鎌鼬の里を見に来た」と言って訪れる外国人観光客も多いと聞きます。秋田のありのままの風景と温かい人情に魅了される人はたくさんいると思います。県の人口減少に歯止めがかかりませんが、20～30代の若者の中にもローカル志向を持つ人が増えています。時代も環境も変われば人々の価値観も徐々に変わっていきます。国内外からの秋田の評価が高いことを考えれば、秋田の将来は明るいと確信しています。

勤務先のマロニエゲートは、百貨店のプランタン銀座を継いで2017年にスタートした読売新聞東京本社100%子会社です。すぐ近くに「秋田ふるさと館」があります。毎週入荷されるたけや製パンの「学生調理」「バナナボート」などを買って、秋田を懐かしんでいます。妻は西馬音内盆踊りで有名な羽後町出身で、いつでも帰省できるという安心感があります。これからも秋田との縁を大切にして、しっかり応援していきます。

## ■略歴

- 1964年 福岡県北九州市生まれ
- 1989年 読売新聞社入社。政治部、国際部記者  
モスクワ、カブル、シンガポール  
特派員などを歴任
- 2014年9月～2016年5月 秋田支局長
- 2016年 モスクワ支局長
- 2018年 アメリカ総局長(ワシントンD.C)
- 2021年5月～ 現職